

シヴァ教再認識派の仏教論理学派批判

——想起と知識の自己認識性をめぐって——

川 尻 洋 平

0. 問題の所在 仏教論理学派の創始者ディグナーガ (ca. 480-540) は、知識は知識自身によって認識されるという知識の自己認識の理論を想起に基づいて確立した。ウトパラデーヴァ (ca. 925-975) 及びアビナヴァグプタ (ca. 975-1025) に代表されるシヴァ教再認識派もまた、知識の自己認識の理論を奉じる。彼らは対論者として仏教論理学派を強く意識した。ウトパラデーヴァは主著 ĪPK において、自己認識の理論を厳密に適用するならば、想起に過去の直接経験が現出することを仏教論理学派が正当化しえないことを指摘する¹⁾。仏教論理学派によれば、想起の対象は過去の直接経験とその対象である。しかし想起に過去の直接経験が対象として現出することは、自己認識の理論上認められない。ウトパラデーヴァによれば、このような問題が生じるのは仏教論理学派がアートマンを認めないからである。アートマンの存在を認めるならば、知識の自己認識の理論の枠組みにおいても、想起に過去の直接経験が現出することは合理的に説明可能である。

本稿は、知識の自己認識性の証拠を想起に求める仏教論理学派の主張を批判する再認識派の想起論を検討し、同派の考える想起の構造分析の考察を通じて、同派が知識の自己認識性の根拠をアートマンの自照性に求めていることを明らかにする。

1. 過去の直接経験の現出の正当化 まずはじめに想起における過去の直接経験の現出の正当化を検討しよう。ウトパラデーヴァは、過去の直接経験が想起主体とは別個のものとして現出しないことを ĪPK I.4.4 において次のように述べる。

「なぜなら、対象 [が直接経験時に、認識主体と別個のものとして現出したの] とは違い、想起において以前の直接経験は [想起主体とは] 別個のものとして顕れないからである。『私は過去に直接経験した』という表現が示すように、[過去の直接経験は] アートマンに昇ることによって顕れるからである」

ここでは、過去の直接経験は想起の対象として現われないということが明示されている点に注目すべきである。ウトパラデーヴァによれば、想起において「私は

過去に直接経験した」というようにアートマンが直接経験を本質とするものとして現出し、直接経験はアートマンと別個のものとしてではなく、アートマンと不可離なものとして現出する²⁾。

アビナヴァグプタは、過去の直接経験の現出の仕方を次のように述べる。

【反論】それでは、[想起に] どのように「過去の直接経験とその対象の」両者が現出するのか。

【答論】[想起に両者は]「私は直接経験した」(anvabhūvam) というこのような形で[現出する]。

【反論】どうしてそう言えるのか。

【答論】「私」というような本質を持つアートマンは、[本質的に] 前時後時の認識であり内向的なものに他ならない。そのような「アートマン」に昇ること (ārohaṇa), すなわち「アートマンに」休らうこと (vīśrama), それを根拠として、自照する、前時の認識を本質とするものであるということ (pūrvasaṃvidrūpātā) が現出するからである。その「直接経験」に休らうもの (līna) である壺も、自照しているも同然のものとして現出する³⁾。

過去の直接経験は「私は直接経験した」(anvabhūvam) という形で現出する。この「私」という本質を有するアートマンは、直接経験した過去にも、想起している現在にも必ず存在しているものである。なぜなら、アートマンは主宰神に他ならず、そのようなアートマンが時間の限定を受けることはありえないからである⁴⁾。アートマンに過去の直接経験が休らうことによって、アートマンは過去の直接経験を本質とするものとして現出する。このように現出することを通じて「私は直接経験した」という想起が起こるのである。アビナヴァグプタによって用いられている「アートマンに休らう」という表現は、知識がアートマンに拠り所を得ることを意味し、知識とアートマンが不異であることを表している⁵⁾。

またここで注意されるべきは、アビナヴァグプタが過去の直接経験だけではなく、過去の直接経験の対象も、自照しているも同然のものとして現出すると注釈している点である。直接経験の対象はその直接経験に休らうものである。さもないければ、その対象が認識されるということがありえないからである。過去の直接経験の対象は過去の直接経験に休らうものとして現出し、過去の直接経験はアートマンに休らうものとして現出する。そしてこのアートマンは自照するものに他ならない⁶⁾。したがって、アートマンの自照性に基づいて、過去の直接経験も自照するものとして現出し、過去の直接経験の自照性に基づいて、過去の直接経験の対象である壺も自照しているも同然のものとして現出する。

「私は直接経験した」という想起において時間の影響を受けないアートマンが時間の限定を受けることは矛盾しているかのように思われる。しかしながら、アートマンが過去の直接経験を本質とするものとして現出するとき、このアートマンは主宰神に他ならない非限定的な認識主体 (aparimitapramāṭr) ではなく、時間などに制限された限定的な認識主体 (parimitapramāṭr) すなわちマーヤー段階の認識主体 (māyāpramāṭr) であるから矛盾は起こらない⁷⁾。しかしどのようにして恒常なるアートマンが想起において「私は直接経験した」というように過去時に属するものを認識するのであろうか。アピナヴァグブタは次のように述べる。

「なぜなら、過去時の顕現によって〔純粹精神〕より〕差異化された身体などとの関係をまさに無視することなく (anavadhūya), その〔想起されている存在は〕光照するからである。(中略) かくして以上のように、まさにかの最高主宰神だけが想起する。なぜなら、その〔最高主宰神〕は想起主体であるからである。この〔想起主体性とは、最高主宰神が〕以上のような種類の反省的意識に相応しい時間や限定された能力 (kāla) などとの接触到に耐えうるマーヤー段階の認識主体 (māyāpramāṭr) 性を帯びることである」⁸⁾

想起されている対象は、過去の直接経験時に現われた限定的な認識主体によって認識されたものである。アートマンは、過去の直接経験時における限定的な認識主体を通じて過去時の限定を受け、過去の直接経験を本質とするものとして、過去に直接経験された対象を「私は直接経験した」と想起するのである。

2. 想起の根本形 再認識派は、想起において過去の直接経験が「私は直接経験した」という形で、アートマンと不可離のものとして現出すると述べることによって、想起に過去の直接経験が対象として現出しないことを正当化した。しかし、日常生活においては、「あの壺」というような形で過去に直接経験した壺が想起されるだけではなく、「あの知識」というような形で過去の直接経験が想起される場合もある。このような場合の想起において、過去の直接経験は、アートマンと別個のものとして現出しているのではないだろうか。

ウトパラデーヴァはこのような疑念に対して ĪPK1.4.6 において次のように述べる。

『このように私にかの知識が起こった』というように想起される、という形で別の形にも分析〔される想起〕は、『私によって知覚された』とこのように想起される、という形で分析〔される想起〕と同じである」

先に挙げた「私は直接経験した」という形の想起の分析に加えて、想起の別様の分析がここで述べられている。したがって、再認識派が提示する想起の分析は次のようにまとめられる。

(1) 「私は直接経験した」(aham anvabhūvam)

(2) 「このように私にかの知識が起こった」(evam sā dṛg āsit me)

(3) 「私によって知覚された」(mayā dṛṣtam)

この内、(2) の形で分析される想起において、知識は「私」の関係項として、つまり両者は異なるものとして表現されている。この (2) と、「私」と知識が別個ではないものとして表示されている (3) には本質的相違がない。確かに、(2) の「私にかの知識が起こった」という形で想起が起こることがあるかもしれない。しかし、そのような形の想起は、(3) の「私によって知覚された」という形の想起を分析したものに他ならない。実際には知識とアートマンが別個のものとして現出することはないからである⁹⁾。したがって、想起の分析において知識とアートマンが別個のものとして表現されとしても、それはちょうど文法的に単一の語を基体と接辞とそれらの意味に分けて確定することと同じように¹⁰⁾、概念的に構想されたものにすぎない¹¹⁾。アビナヴァグプタによれば (3) の「私によって知覚された」という想起が想起の根本形である¹²⁾。さらに、この (3) と (1) の想起に意味上の違いはなく、その違いは表現上のものにすぎない。いずれも知識が認識主体であるアートマンと不可離であることを表現している¹³⁾。

アビナヴァグプタは、(1) において両者が不異であることを次のように述べる。

[[‘anvabhūvam’ という語においては]「語基と接辞は、接辞の意味を共に表示する」¹⁴⁾ という道理に基づいて、[接辞によって表示される]数によって含意される[行為主体]であり、あるいはその[数]をもつ行為主体であり、接辞の意味である「私」という対象に、直接経験は内包される」¹⁵⁾

‘anvabhūvam’ (anu√bhū, 1st sg. aor. P.) という語において、語基の意味である直接経験と接辞の意味である「私」のうち、主要素である「私」を従属要素である直接経験が限定する。この場合、この語は両者を不異なるものとして表示する。「私」の対象であるアートマンの直接経験の内包とは両者の不異性を表している。

また (3) において、知覚行為が、接辞の意味である知覚の目的ではなく、行為主体に休らうことをアビナヴァグプタは次のように述べる。

「なぜなら、行為主体が行為を通じて獲得するものが目的であるからである¹⁶⁾。したがって、知覚行為はまさに行為主体に存するものである」¹⁷⁾

‘dṛṣtam’ という語において Kta 接辞によって目的が表示され、行為主体が表示されないとしても、その目的は行為主体が行為を通じて獲得するものに他ならない。したがって、知覚行為は、知覚の目的ではなく、行為主体に起こるのである¹⁸⁾。

アビナヴァグプタは、以上の分析を通じてアートマンと知識の不異性を確立する。

(1) と (3) のいずれにおいても対象が表示されていない。しかし、それは想起に対象がないということが意図されているのではない。アビナヴァグプタによれば、ここで対象が表示されていないのは、対象が自立的に現出しているのではなく、直接経験に依拠して間接的にアートマンに現出しているからである¹⁹⁾。

3. 結論 知識の自己認識の理論を奉じる再認識派において、いかなる知識も他の知識の対象として現出することはない。したがって、過去の直接経験は想起の対象として現出しえない。再認識派は、仏教論理学派とは違いアートマンを認めることによって、知識の自己認識の理論を前提にしても、想起に過去の直接経験が現出することを合理的に説明しうる。そしてこのアートマンは知識と別個のものではない。想起において過去の直接経験は想起の対象としてではなく、アートマンと不異なるものとして現出する。再認識派によれば、知識の自己認識性の根幹には知識と不可離であるアートマンの自照性があるのである。

略号 APSV: *Utpaladeva's aṣṭāpamāṭṣiddhivṛtti in Siddhitrāyī*, Shastri ed., 1921. ĪPK: *Utpaladeva's Īśvarapratyabhijñāṅkārikā*, Torella, ed., Roma, 1994. ĪPKV: *Īśvarapratyabhijñāṅkārikāvṛtti*, see ĪPK. ĪPV: *Abhinavagupta's Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*, Iyer and Pandey ed., 1938, 1950, 2 vols, Allahabad. [Reprinted 1986: Delhi: Motilal Banarsidass]. MBh: Patañjali's *Vyākaraṇa-Mahābhāṣya*, Vedavrata, ed. P. Pāṇini's *Aṣṭādhyāyī*. VP: Bhartṛhari's *Vākyapadīya*, Rau ed., 1977.

1) See ĪPK I.3.1. 2) See ĪPK V.1.4.4. 3) See ĪPV I pp.167, 8-69, 1. 4) See ĪPV I pp.149, 12-50, 1. 5) 再認識派によれば、非精神的なものは精神的なものの顯れにすぎない。非精神的な対象でさえも、「私」という反省的意識を拠り所とするから精神的なものとなる。なぜなら、このとき非精神的なものは、「私」という反省的意識の主体と不異であるので、「私」という反省的意識に休らうからである。See APSV 15. 6) See ĪPK V.1.1.2. 7) 恒常なアートマンが時間的な限定を受けることによって生じる矛盾がいかに回避されるかについては、戸田裕久「アビナヴァグプタの記憶の理論」(『印仏研』1990)を参照せよ。 8) See ĪPV I p.150, 1-3. 9) See ĪPV I p.71, 1-2. 10) See VP 3.4.1-2. 11) See ĪPV I pp.178, 5-179, 1. 12) See ĪPV I p.180, 2-3. 13) See ĪPV I p.182, 2-3. 14) MBh ad vt. P.3.1.67: prakṛtipratyayau pratyayārthaṃ saha brūtaḥ. 15) See ĪPV I p.169, 2-3. 16) See P.1.4.49: kartur īpsitatamaṃ karma // 17) See ĪPV I p.180, 4-5. 18) パースカラカントは、文法家が知覚行為は行為主体に存すると述べていることに言及する。See ĪPV I p.180, 22-24. 19) See ĪPV I pp.169, 3-170, 1.

〈キーワード〉 再認識派, 仏教論理学派, 自己認識, 想起, アートマン

(広島大学大学院)

165. A Critique of the Buddhist Doctrine of Self-Awareness in the Pratyabhijñā School

Yōhei KAWAJIRI

Dignāga established the doctrine of self-awareness of knowledge (*svasam-vedana*) on the assumption that remembrance has for its objects the object which was perceived before and its perception itself which occurred before. The masters of the Pratyabhijñā school, Utpaladeva and Abhinavagupta, criticize this assumption in their works, the *Īśvarapratyabhijñākārikā* and the *Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*. According to this school, granted that there appears the former perception of an object in remembrance, it does not appear there as an object. If it did, there would occur contradiction with the doctrine of self-awareness of knowledge. For, theoretically speaking, perception cannot be cognized by another cognition.

According to the Pratyabhijñā school, however, in remembrance the former perception appears in the form of 'I perceived' (*aham anvabhūvam*). This indicates that in remembrance the former perception appears as resting on the self (*ātman*) which is self-luminous (*svaprakāśa*), that is, as not separate from the self. Thus, for the Pratyabhijñā school, the doctrine of self-awareness of knowledge should be founded on the theory that any knowledge is never separated from the self which is self-luminous. In the view of this school, Buddhist epistemologists, who hold the doctrine of non-self, could not introduce remembrance as evidence in order to sufficiently establish the doctrine of self-awareness of knowledge.

166. Peculiarity of Svabhāva: Some basic dogmatic concepts of Sarvāstivādins in the *Abhidharmakośabhāṣya*

Naoki SAITO

In the *Abhidharmakośabhāṣya* a dharma in the highest reality (*paramārthatas*) exists as substance (*dravyatas*), but not as a virtual thing (*prajñaptitas*). This dharma as substance must exist in the following two complementary